

ぼくとペンちゃんて宇宙へ

宮原 悠吾

ぼくは、緊張するとおっちよこちよいにな
ってしまふ。例えば、運動会の徒競走では、
練習の時は早く走れても、本番で転んでしま
ったりする。また、皆に注目されながら話を
する時は、話し方がぎくしゃくしてしまつて、
上手く話せなかつたりする。つまり、ドキド
キして、頭の中が真っ白になると実力が出せ
ない。そんな時、誰かがそばにいてくれたら
いいのになあと思う。だから、ぼくは宇宙に
ペットロボットを連れて行こうと思つている。
ペットとの触れ合いで、ストレスケアなど
を行い、心をいい状態にする療法をペットを
ラビーと言う。例えば、病院でフーシリテイ
ドックという仕事をしている犬がいる。フー
シリテイドッグは、難病と闘う子どもたちの心
を支えている。フーシリテイドッグと触れ合
うことで、痛い手術でも、立ち向かう勇気が湧
くという体験談を読んだことがある。

宇宙は危険がたかさんある。一個でも装置が故障したら、すぐに死んでしまうような所だ。家族からも離れて、生きるか死ぬかという大きすぎるストレスを抱える。しかも、衣食住について、いろいろと不便だ。シャワーをあびてワフレツシユすることまでできないし、食べるものも、限られた量の宇宙食だけだし、住むところも狭いという、あまり気持ち良くないところだ。何より、酸素と重力がない。宇宙に行くという事は葛がいっぱいだ

けれども、実際は、そういう怖さや不安、不便な中で任務をこなさないといけない。しかも、宇宙での命にかかわる危険な任務は、気を引き締めていないといけない。しかし、一度気を引きしめてしまつたら、緊張をほぐすのは中々難しい。そんな時にペットロボットが、フアシリティドッグのようにストレッチアのお仕事をすする。

ぼくが考えたこのペットロボットの名前は、ペンちゃんだ。ペンギン型ロボットのパンちゃん

ちゃんは、ピンク色で耳が光り、フワフワの感
触だ。そしてペンちゃんは、両腕で抱けるぐ
らいの大きさだ。ひざの上に載せたら、じん
わり温かくて丸い体だ。ちよつと重い。ペン
ちゃんはとて優しい声で、ぼくよりもゆっ
くりしゃべってくれる。このように、ペンち
ゃんは、抱きしめたくなるような特徴をたく
さん持っている。

ペンちゃんが一番得意な事は、アドバイス
をする事だ。ペンちゃんとは、宇宙に行く一
年ぐらい前から、一緒に生活をしようと思っ
ている。なぜなら、ぼくの性格や、健康の変
わりやすさ、得意な事と不得意な事、それに
好きな事などを知ってもらいたいからだ。ペ
ンちゃんには、AIが搭載されているので、
一緒に生活する中で知ってもらったぼくの情
報を整理して、アドバイスしてくれる。他に
も、ぼくが苦手な手作業をやっているとなら
ば、これはこうしたほうがいいんじゃないかな。
「ヤッくり、しんこき」うして。

実験の手順違うよ。水を忘れちゃってるよ。
「そうそう、うまくいくところよ。」
などと、間違えそうなのところなどを教えてく
れる。

そして、ペンちゃんには、楽しい機能も付
いている。音楽もたくさん知っているし、歌
がうまいから時々歌って気分を変えさせてく
れたりもする。それにペンちゃんは、世界の
おもしろい話100話が世界の全ての言語で
搭載されている。毎朝一話ずつ話してくれ

る。だからハクルーの人と笑って盛り上がる
ためのネタをくれる。話下手でも国が違っ
ても、一緒に笑えば仲良くなれる。

さらに、もし何かを運ぶ作業があったら、
力持ちだから手伝ってくれる。生きるための
科学知識も知っている。

だからぼくは、ペンちゃんと一緒に宇宙に
いきたい。そうしたら、ぼく一人では難しい
事がちよつと出来るようになると思う。

ぼくは、心のケアを宇宙飛行士一人に任せ

るのは、昔の考え方だと思ふ。心のいい状態
ウエルビーイングを保つために、ベトナムに助
けてもらつてもいいと思う。大切なことは、
宇宙飛行士としての任務を、しっかり安全に
果たす事だからだ。

宇宙での生活は、地球とは勝手が違ふけれ
ど、ペンチャ人のように、一緒に宇宙に行け
るパートナーがいたらいいと思う。ぼく見た
いにさみしがりやで、緊張しがちな人で宇宙
飛行士になれるかもしれない。実はぼくは、
さみしがりやの自分が好きだ。緊張しがちな
自分も嫌いだ。ぼくの感受性は、ぼく
のいいところだと、母はいつもいってくれる。
でも、ミスしがちになることは克服したいか
ら、科学の力を使いたい。そして、ぼくも宇
宙飛行士になつて見たい。